「黎明期の日本語書記言語と漢文」

Aldo Tollini
Università “Ca’ Foscari” Venezia

1.

アルファベット圏では古代ローマ文明、漢字圏では中国文明の二つに大きく分けることができるが、これらの文明の誕生と発達を促したのは言うまでもなく文字の使用である。文字がなければ、おそらく現在知られているような優れた文化は成立しなかったであろう。ローマ帝国ではラテン語が、中国文化圏では漢字が使用され、両者とも、文化範囲が広がるにつれ、隣国から徐々に離れた遠い国へと「共通言語」(lingua franca) として、また情報伝達の手段として広く使われるようになった。

文字はこの二大文明の発展に重要な役割を果たした。それは書記言語の誕生である。共通の書記言語、つまりラテン語と漢文は、衛星国の言語に影響を与えつつ、もともとその国にあった言語をも変えてしまった。多数の例の中でその著しい例が、英語と日本語である。現在の英語の語彙の半分以上はラテン系であり、今の日本語の語彙の半分近くは漢語である。また、その影響は語彙レベルにとどまらず、文法、表記、音声にも及んでいる。ラテン語も漢文も、口頭言語より、書記言語の方に大きな影響を与えた。人々はラテン語あるいは漢文を使って互いに情報や感情を伝えていたのである。

しかし、ラテン語と漢文には決定的な違いがあった。それは、文字の性質である。アルファベットは音声文字であり、一方、漢字は表語文字である。漢字は口頭言語を知らなくても、文字とその基本的な組み合わせのルールさえ知っていれば理解できた。したがって、中国文明圏においては、漢文が書記言語としての共通言語であり、そして文字中心の手

国文学46-Aldo Tollini.indd 1 12/11/12 10:52

段であった。表記を含め、周辺言語を大きく変えたのである。日本語はその一例である。日本語の表記はいかに漢文の影響を受け、発展していったか。

2.

ラテン語も漢文同様書記言語であり、口頭言語とはかなり異なる。差異の程度は言語、場所、時期によって大きく違うが、いずれの言語も簡潔さを特徴としていた。不安定な口頭言語と違い、テキストに使用する言語は、読むためのものであり、安定しており、ゆっくり、時間をかけて理解できるので、口頭言語の儚さに対応するための冗長が不要である。分類上、ラテン語と漢文は違う種類に属し、ラテン語は総合的言語(synthetic language)、漢文は分析的言語(analytic language)に分類されるが、どちらも冗漫がない統語法的な関係を表している。日本と韓国ではその極端な簡潔さを補うために、「漢文訓読」という言語的なストラテジーを発明した。訓読に、付属的な部分（主に助詞と助動詞）を補いながら漢文を日本語か日本語に近い言葉に訳したのである。

ラテン語においても、ラテン系の言語が誕生する過程で次第にラテン語の簡潔さを変化させ、総合的な語彙ストラテジー、つまり語形を変化（declensions）させる代わりに単語を分裂して、付属語を独立語として表した。これは漢文訓読の助詞・助動詞を補足することに類似している。総合的書記言語であるラテン語が、時間が経つにつれて分析的な要素を有するラテン系の言語に変わり、反対に日本では、分析的書記言語である漢文が総合的な要素を有する日本語に近づいていくという現象は興味深い。

口頭言語から離れ日常生活から独立した書記言語は、コンパクトで冗長がないほうが合理的で、情報伝達能力は高い。特に、数多くの違う言語の国民に使われる場合はそうである。つまり、自分の書記言語ではなく、できる限り土着言語から離れ、抽象的な手段として使う場合である。それは、言語や習慣の異なる幅の広いコミュニティーのツールといえよう。しかし、それとともに、独自の社会が形成した土着の言語が強化され広く使われるようになれば、当然抽象的なツールとしての書記言語だけでは不十分になり、その結果新しい書記言語あるいは文体が生まれる。この必然的なプロセスはさまざまな形をとっているが、かならずと言っていいほど、抽象的な書記言語をモデルにしてそこから生まれている。日本の場合、日本語表記の誕生、形成とその発展はいうまでもなく、漢文から、あるいは「漢文との交渉」から生まれた。日本表記の長い歴史を振り返ってみれば、表記の多数な形、つまり数多くの文体が生まれたのはやはり威信のあるモデル（漢文）を念頭に入れながらも、列島語を書きあらわす試みがあった結果なのではないだろうか。

3.

口頭言語をそのまま書きあらわす文体、例えば万葉仮名文体、かな専用文体などは別として、日本語の表記の文体の多くは、「漢文との交渉」によって形成され、長く続いたのである。つまり、漢文をモデルにしながらも、列島語の要素を取り入れたり、あるいは文章を替えたりして、日本人が理解できるように工夫したのある。古代日本でテキストを書くときに関わる要素を図で表すと次のようになる。

モデル言語（漢文）
↓
音声テキスト$_1$（L_1）[1] → 書記テキスト（L_{ts}）← 音声テキスト$_2$（L_2）
↑
用字法

書記テキストの形成には、文字化する音声テキスト[1]、モデル言語（漢

1　存在しない場合もある。

国文学46-Aldo Tollini.indd 2-3　12/11/12 10:52

文)、そして、読者が読めるように工夫された読みの音声テキスト[2]、さらに、漢字の使用に制約された用字法が影響する。このように、口頭言語を文字を使って書くというのは、かなり複雑なプロセスであり、複数の要素を一つにまとめるとき、要素のバランスによって様々な文体が生まれる。モデル言語に重心を置けば、文体は漢文に近くなり、そうでなければ、漢文が崩れ列島語の要素が際立ってくる。文体は直線的には発達しないので、テキストの内容、目的、読み手などによって選択される。日記、物語、和歌には和文体が多く使用されているが、学門書や公文書には漢文調が優勢であり、それと同時にこれら複数の文体は共存している。

４．

では、漢文・漢文訓読は日本で発達した書記言語にどのような影響を与えたのであろうか。本稿では、これについては詳細には触れず、概説的に取り上げることにする。

日本の書記言語と漢文はどのような関係にあったのか、また漢文が黎明しつつあった日本の書記言語にどのような影響を与えたのかという疑問を解くために、漢文訓読のストラテジーを分析する方法をとった。漢文訓読は漢文から日本語（列島語）に転換する言語的なストラテジーであるからだ。

漢文訓読の特徴は、語順を替える、分析的言語に欠かせない付属語を記す、助詞の順序を替える、待遇表現語彙を補うという点にある。

１．SVO（漢文） を SOV（列島語）にする
２．前置詞（漢文）を後置詞（列島語）にする
３．漢文にない付属語（助詞、助動詞）を補う

2　本で書かれた「漢文」には純漢文から崩れた漢文（漢文調）の諸文体が存在するが、この論文では便宜上「漢文」と呼ぶ。

４．漢文にはほとんど存在しない待遇表現語彙を補う（特に尊敬語と謙譲語)。

漢文から徐々に離れて、列島語の要素が増えると、純漢文から、漢文の混交、変体漢文・和化漢文になるというように上記の４つの方法で書き表される。

古代日本の表記は、和文体と漢文体に分けられるが、和文体の場合、奈良時代の表記の試みをみると次の２種類に分類できる。

１．和文（列島語）を漢字で書く。
　音声文字で書く→万葉仮名文体
　これは言語を直接的に書く方法。

２．和文（列島語）を漢文で書く。
　和文体に漢文体的な要素、動詞が目的格に先行する、助詞・助動詞を省略するなどを取り入れて書く。たとえば、漢文訓読、変体漢文などがある。
　これは言語を間接的に書く方法。

ここでは「和語を漢文で書く」プロセスに焦点を絞って論じる。黎明期の日本の書記言語には、次の二つがある。

１．和文（列島語）を漢文で書く⇒和文体にある漢文的な要素
２．漢文を和文で書く⇒（日本で書かれた）漢文体にある和文体的な要素

このように日本の書記言語は混種的に形成された。

１．　<u>和文体にある漢文的な要素</u>

国文学46-Aldo Tollini.indd　4-5　　12/11/12　10:52

「和文体にある漢文的な要素」は主に次の３点があげられる。
１．SOV（列島語）　⇒ SVO（漢文）に替える
２．助詞・助動詞の省略
３．漢文的な助詞・助動詞の位置

１．　SOV（列島語）　⇒SVO（漢文）に替える

目的語の前に動詞がくる和文体は、古代テキストには数多くある。「古事記」は列島語で読まれたと推測するが、書記言語も列島語、つまり和文体で書かれたとする。すくなくとも、列島語を念頭に入れて、列島の人々に読まれるように書かれたであろう。

たとえば、
「故、所避追而、降出雲國之肥河上、名鳥髪地」＝故、避追はえて、出雲國の肥の河上、名は鳥髪といふ地に降りたまひき。（古事記）

原文の「降」は書くときには漢文の語順で、読むときには文末にくる。

２．　助詞・助動詞の省略

１.「佐野三家定賜健守命孫黒売刀自」＝佐野ノ三家ト定メ賜ヘル[3]健守ノ命ノ孫黒売ノ刀自　（「塩山ノ上碑（山名村の碑文）」、681 年[4]）

語順や語法などは列島語だが、付属語は文字に全く記されていない。唯一の漢文的な文字列は「記定文也」（＝文を記し定む）である。

3　または「定め賜ひし」。
4　これは、列島語のみで書かれたテキストの中で、かなり早い時期に遡る。

２.「今人是窟辺行時必声磅●而行若密行者神現而飄風起行船者必覆」＝今の人、是（こ）の窟（いはや）の辺（ほとり）を行く時は、必（かなら）ず声（こゑ）磅●（とどろ）かして行く。若（も）し、密（ひそ）かに行かば、神現（あらは）れて、飄風（つむじ）起（おこ）り、行く船は必（かなら）ず覆（くつが）へる。[5]（「出雲風土記」（８世紀初期））

これは列島語で書かれているが、付属語が少ない例である。

３．　助詞・助動詞の位置が漢文と同じ

１.「吾母将通」　＝　あれもかよはむ　（万葉集、80 番歌）
２.「如此許　戀乍不有者」　＝　かくばかり　こひつつあらずは　（万葉集、86 番歌）
3.「可辛苦」＝　くるしかるべし　（万葉集、440 番歌）
4.「塩乎令満」＝　しほをみたしめ　（万葉集、388 番歌）

これは和文体で書かれているが、助動詞は漢語を使って記されている例である。

２．　<u>漢文体にある和文体的な要素</u>

「漢文体にある和文体的な要素」は、次の３点を挙げることができる。
１．SVO（漢文）　⇒SOV（列島語）に替える
２．尊敬語・謙譲語を使う

5　秋本吉郎 校注、『日本古典文学大系』、2.「風土記」、東京、岩波書店、1958、148 頁　（出雲国風土記）。

国文学46-Aldo Tollini.indd　6-7　12/11/12　10:52

３．和文的な助詞・助動詞の存在

１．　SVO（漢文）　SOV（列島語）に替える

「白馬鳴向山 / 欲其上草食 / 女人向男咲 / 相遊其下也」[6]（飛鳥池遺跡北地区で発掘された木簡）

表
白馬鳴向山　＝　白馬、山ニ向ヒテ鳴ク
欲其上草食　＝　其上ニ、草ヲ食フガ欲ス

裏
女人向男咲　＝　女ノ人、男ニ向ヒテ咲フ（＝笑う）
相遊其下也　＝　相遊バム、其下ニ　（飛鳥池の木簡、８世紀初期）

このテキストは漢詩で、列島語式に目的語の後に来る動詞が３つあり、文章の末尾に来る動詞もある。

２．　尊敬語・謙譲語を使う

１．「大御身労賜時」＝ 大御身労み賜ひし時
「薬師像作仕奉」＝ 薬師の像を作り仕へ奉らむ」（法隆寺金堂薬師仏造像銘（607 年？）[7]

6　奈良文化財研究所木簡データベース。ウエブサイト：http://www.nabunken.jp/Open/mokkan/mokkan1.html。　木　簡　番　号 248. Lurie David B., *Realms of Literacy. Early Japan and the history of Writing*, Harvard East Asian Monographs; 335, Cambridge and London, 2011, p.189 も見よう。
7　稲岡耕二氏によれば、このテキストは推古 15 年（568 年）に作られた。稲岡耕二、『万葉表記論』、塙書房、1976 年、98 頁。

90 字が並んでいる変体漢文で書かれたテキストで、列島語の影響が見られる。

「大御」の尊敬接頭辞と「賜」（たまふ）と「奉」（たてまつる）という尊敬動詞が使われている。

２．「歳次丙寅年正月生十八日記高屋大夫為分韓婦夫人名阿麻古願南无頂礼作奏也」[8] ＝　歳、丙寅に次る年の正月生十八日に記す。高屋大夫、分れし韓婦夫人、名は阿麻古とまうすが為に、願ひ南无頂礼して作り奏す[9]（菩薩半跏像銘（606 年）

このテキストでは、「作奏」は「作り奏す」で、「つくりまをす」と読み、「奏」（まをす）という尊敬動詞が使われている。

３．　和文的な助詞・助動詞の存在

典型的なものは「者」の使用である。これは、広く使われ、主に次の役割を果たしている。

１．現代語の係助詞「は」の役割
２．仮定形の「ば」の役割

例：

8　沖森卓也、「鉄剣銘、木簡。漢字渡来と風景」、『国文学』、48、2003 年、12 月、74 頁。
9　沖森卓也、『万葉歌の表記と万葉仮名』、埼玉文学館での講演（2003 年 11 月 22 日）、ハンドアウット、4 頁。

国文学46-Aldo Tollini.indd　8-9　　12/11/12　10:52

1.a. 「夫常陸国者」= それ常陸（ひたち）の国は （常陸国風土記、8世紀初期）
1.b. 「此三柱神者」= 此の三柱（みはしら）の神は（古事記、712年）。

2.a.「当時崩賜造不堪者」= 当時崩り賜ひて造り堪へずあれば（法隆寺金堂薬師仏造像銘、7世紀頃）
2.b.「烟者」= 烟（けぶり）ならば （常陸国風土記、8世紀初期）
2.c.「待撃者」= 待ち撃（う）てば （古事記、712年）。

5.

このように、日本の書記言語の形成には、付属語の使用が軸となっている。しかし、その多くは、文章を漢文らしく見せかけるために、省略されたり、漢文から借りたり、新しく作られたりした。省略しない場合でも漢語を使う傾向が強かった。日本の書記言語が漢文訓読から強い影響を受けたことは確かである。漢字語で記されている付属語もよくみられる。これらは、「助字」または「助辞」という。よく使われた助辞には、於（に、において）、与（と）、而（て、して）、者（は、ば）、哉（か・かも・や・やも）、耶（か・や）、令（しむ）、雖（とも・ど・ども）、将（む）, 従（ゆ・より）、可（べし）、也（なり）などがある。表記が発展する段階では、助辞のほうが万葉仮名よりも確かであった。たとえば、7世紀に遡る「法隆寺金堂薬師仏造像銘」に「故将造寺」という文があるが、これは「故に寺を造らむ」と読む。

列島語に従う言語構造のテキストにも助辞がよくあらわれる。たとえば、7世紀前半に書かれた「西河原森ノ内遺跡出土木簡」に次の例がある。

稲者 = 稲は、
我者 = 我は、

自舟人率而可行也＝自ら舟人を率て行くべきなり。

この例から、初期の日本における表記は漢文・漢文訓読に倣って、「表意文字中心」であるといえる。言いかえれば、実字・実語を中心にした表記である。少し時期が下がると、漢文から真似た助辞の代わりに、日本人が慣れ親しんで使ってきた漢字語を使うようになった。これらも、もちろん、漢字語として、漢文から来ており、漢文の助辞を真似ているが、列島語を通して、新しい役割を担ったのである。言語学者は助辞と区別するために、これらを「補助字」と名づけた。助辞から補助字への展開は、漢文の雰囲気を保ちながらも、列島語の語順に従い、漢字語を使って書き表すという意識がみえる。これは、列島語の忠実な表記への一歩である。

たとえば、

在（けり、たり、り）、与（こす, こそ）、社（こす, こそ）、為（す）、御（す）、有（たり）、去（ぬ）、量（ばかり）、及（まで）、令（しむ）、来（けり）、坐（ます）、

などがある。また、「難波宮跡」で発掘された7世紀の半ばごろの木簡に、次の例がある。

「盗以此［ ］[10]在」= 盗みて此を以て往きたり

『万葉集』にも、特に人麻呂の略体で書かれた歌によくみられる。

1．過去君之 = すぎにしきみが （47番歌）

10 ブランクは「往」と推定される。

国文学46-Aldo Tollini.indd 10-11 12/11/12 10:52

2．左夜深去来　＝　さよふけにけり　（274 番歌）
3．此日暮去者　＝　このひくれなば　（275 番歌）
4．衣乾有　＝　ころもほしたり　（28 番歌）
5．是量　＝　かくばかり　（2372 番歌）
6．人社見良目　＝　ひとこそみらめ　（138 番歌）
7．立在松樹　＝　たてるまつのき（309 番歌）
8．敷座在　＝しきませる（329 番歌）

6．

付属語の文字化、助辞、補助字、待遇表現の使用などの手段を使い、列島語の記し方が次第に形をつくっていった。和文体は漢文調の語順以外は、列島語の口頭言語に従い、仮名の発明以前にも、奈良時代を含む時代まで書かれていたが、それと平行して、漢文調の文体も色々な形で共存していた。和文体で書かれたテキストに、漢文・漢文訓読の影響がみられると同時に、漢文体で書かれたテキストに和文体的な要素も存在しているというように、この２つの日本の書記言語は互いに影響を受けたのである。

長い間、和文体・和文体調と漢文・漢文調のおおざっぱな二股の文体が同時に発展していった。日本語の形成にほとんど影響を及ぼさなかった万葉仮名文体を除き、列島語の書記言語は漢文・漢文訓読の和文体化によって、混種言語として完成していったのである。

古代日本には、数多くの書記言語があり、「多言語併用」、言いかえれば「多文体併用」という言語状況であった。文学作品は別とし、その当時のテキストは読みの正確さよりも情報の伝達が重要視された。そのため、口頭言語に忠実な文体よりも、確かな手段はなによりも漢文であった。[11] 情報伝達というのは書き言葉の理解ができる列島の人々のみではなく、より幅広く中国文化圏に伝達する目的があった。正確に「読む」より、確かな「理解」のほうを優先した。

初め、日本人は、それまで口頭で伝えられてきた神話や歌以外は、漢文か漢文調で書き表し、それらを列島を越えより広い世界に伝えることができるという魅力を感じていたのではないだろうか。

まだ標準化されていなかったころの用字法は、気儘に使うと誤解を招く危険性をはらんではいたが、ある基準に、つまりあるモデルに従えば、曖昧さが避けられると考え、漢文を模倣した。日本人の書いた多くのテキストが「似せ漢文」（和化漢文）であるのは、その当時の唯一の文字言語のモデルは漢文にほかならなかったからである。

11　山口佳紀、『古事記の表記と訓読』、有精堂、1995 と矢嶋、2006。

国文学46-Aldo Tollini.indd 12-13　12/11/12 10:52